

「源氏物語に登場する植物……その 3」

松谷 茂

■はじめに

今から千年も前、紫式部は身近にある植物の変化してゆく過程を時間をかけて観察し、そのさまを五感で感じ物語展開に絶妙に登場させた。

一人の女性が物語にこれほどまで多くの植物を登場させることは画期的なことであったが、それ以上に、植物の名前のみならず、その植物のいろいろな特徴も同時によく知っていた、という事実には驚く。

物語には 100 種類を超える植物が登場する。千年前の植物の名前がすべて現在のものとイコールということにはならないが、木竹類約 50 種類、草本類約 60 種類、これらの中にはシダ類や熱帯植物も含まれる。

彼女はただ漫然と植物を見ていたのではなく、フェノロジー(植物季節学)を実感、現代の我々が今忘れかけている、植物がゆっくりと動きゆく姿を長い時間軸上に置いてじっくりと見続けていたことは間違いない。

その過程で生まれつきの豊かな感性に磨きをかけ、ストーリー展開に多くの植物—親子別れの名場面での二葉の松、玉鬘には八重山吹、故桐壺院の思い出話に橘をまた、自然風景やりっぱな庭のみならず荒れ果てた庭の様子の手蓐に至るまで一を、抒情的に登場させた。

全 54 帖のうちのほぼ半分の帖、特に、はじめの 9 帖分には植物に関係した名前がついている。また、ヒロインたちに植物を表象させた展開や、世の中の安定継続を願って使ったと思われる茎や根の長い植物(フタバアオイ、ハス、ヒカゲノカズラ、ヤブコウジ など)を登場させるなど、個々の植物が出てくる場面を物語の流れの中で見ていくと興味が尽きない。

四季があり、植生の豊富な日本だからこそ多くの植物を登場させることができた。

日本の植物史(誌)上からも貴重な源氏物語である。

それ以上に紫式部の豊かな感性に驚きを隠し得ないし、彼女は超天才であるとの感を持つ。

■各論

① 松 最も多く登場する(60 回超)。紫式部が見た松はアカマツかクロマツか。

母娘、生き別れの悲しい名場面に詠う「二葉の松」とは。場面は嵐山➡アカマツだっ!
五葉松も見ていた。

② 桜 ヤマザクラ、八重桜、幻の「樺桜」は悩みのたね。

③ 柳 枝垂れは「柳」、枝垂れないのは「楊」。姫君・女三の宮が「如月の青柳」と表象されたのはなぜか。

- ④ 紫 源氏最愛の女性「紫の上」。物語は「紫のゆかり」。
ムラサキ(*Lithospermum erythrorhizon*)の花の色は白。どこが紫?
- ⑤ 橘 花は雅な芳香、いつまでも嗅いでいたい。明石の君に表象。
果実は当時果物として食されていた。今、果物屋の店頭になく残念!!
清少納言も気に入っていた。
- ⑥ 梅 唐風文化の象徴。当初は白梅か。物語ではほとんどが紅梅、芳香を愛でた。
- ⑦ 紅花 姫君・末摘花。女性が女性の容貌をここまで書くのかと、読みながらヒヤヒヤ。
- ⑧ 山吹 姫君・玉鬘に表象。八重山吹を見ていたことに驚き。
山の谷間に咲く山吹に当たった一瞬の太陽光に反射した鮮やか黄色を見た瞬間、
紫式部は「玉鬘」の姿を思い描いたに違いない、と勝手想像
- ⑨ 撫子 ⑩と関連。夕顔の忘れ形見・玉鬘に表象。
カワイイ子供だから頭をナデナデ⇒ナデシコ。
別名を常夏(床懐かしい)は大人の女性。
- ⑩ 夕顔 ⑨と関連。はかない人生を送った母親・夕顔のストーリーは、はかない花・ユウガオ
(ウリ科 *Lagenaria siceraria* var. *hispida*)の消長(生きざま〜死にざま)を観察したから
こそその物語展開に違いない。ヨルガオ(ヒルガオ科 *Ipomoea alba*)ではないっ!
- ⑪ 菊 秋の花としては断トツの 20 回登場。次いで女郎花。
中国の交雑種のキクが薬用として導入され、観賞された説。
気品のある花として別格の花。宮廷中心に愛でられた。
重陽の節句。菊酒。着せ綿。
諸共におきろし  の朝露もひとり袂にかかる秋かな
散りぎわの美学の典型例として、あえてこの場面に象徴的に用いた。対極の美学(栄華
の時代から人生後半の悲壮感・最愛の女性を失った悲しみのどん底状態)の象徴か。
- ⑫ 宿木 大きな球状に成長するヤドリギ(ビャクダン科)ではなく、ナツツタ(ブドウ科)だっ!
- ⑬ 藤袴 葉や茎が生渴き⇒芳香。桜餅のオオシマザクラの葉と同じ、クマリン。
入浴の習慣がなかった頃、姫君・男君たちの体臭消し対策として大量保存して
いたのでは。水にぬらすと匂いがたつ。
夕霧が玉鬘に花のプレゼント、その魂胆は?
現代、藤袴の匂い袋がひそかに人気
- ⑭ 榊 榊葉の香をなつかしみ とあるが、サカキ(ツバキ科 *Cleyera japonica*)の葉は
歌に詠むほど香るか? 別種なのか?
- ⑮ 女郎花 風に揺れる優雅な花姿は、当時人気。横から見た幾何学的散房花序は美しい

- ①⑥ 吾木香 小花がぎっしり集合した花序は上から下に咲き進む。花は塩素臭。
物語では芳香三花。菊、藤袴、ものげなき吾木香。日本人の嗅覚は千年で
変化したか？
- ①⑦ 栗 食べる表現が面白い。はろはろと食ふ
- ①⑧ 山橘(藪柑子) 贈り物の添え物として、赤い実を添えた(作り物だが)。
物語では一度のみ登場。花は一見の価値あり。
紫式部は、長い地中に伸びる根茎も観察していたに違いない
- ①⑨ 蓬・葎 荒れ放題の庭に生える指標植物。王朝社会の陰の真実も記述したから
こそ、現代にまで人気の文学作品になったのでは、と勝手想像
- ②⑩ 桔梗 紫のゆかりにふさわしい花色なのに、登場回数は一度のみ。なぜか？
雄性先熟。
英名は Balloon Flower。どこが？

以上